
お花見day ~ 桜の様な笑顔 ~

彩瀬姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お花見day、桜の様な笑顔

【Nコード】

N6593G

【作者名】

彩瀬姫

【あらすじ】

BL。家で花見をしていた響と大翔。実は響はある悩みを抱えていて？「響×大翔」シリーズ第三弾。

(前書き)

この話はボーイズラブです。苦手な方はご注意ください。

今日はお花見をしている。

と言っても家の中からだけ。

僕 響ひびは花粉症。外に出ると、鼻水・くしゃみが出て、目は赤くなる。すごい時は喉が痒くなるのだ。

外にいればとてもじゃないけど、楽しくお花見ができそうじゃない。だから家の中からのお花見となったのだ。

偶然僕の家の外には枝垂桜しだれざくらがあり、2階にある僕の部屋からとても綺麗に見えるのだ。

枝垂れ桜を独り占め。大翔もいるから、二人占め？

まあー二人一緒にいることができるからどっちでもいいかな……。

「綺麗だな」

隣に座っていた僕の恋人 大翔ひろとがぽつりと呟く。枝垂桜を見ている彼の姿。とても見惚れてしまう。

カッコいいってもんじゃない。素敵？って感じだ！！

「うん。綺麗だね……」

外で風が吹いているのか、桜の花弁はなびらがひらひらと舞っている。本当に綺麗……なはずなのに、それが僕を寂しくさせていた。

不安定と言うのだろうか？

桜の花弁のように、僕自身が舞うというか散ってしまいそうなんだ。

その原因は僕の大好きな大翔である。

「どうしたんだ？元気がないな。熱でもあるのか？」

心配そうに俺のおでこに手を当てる。大翔の手は冷たくひんやりして、とても気持ちがいい。それとも僕のおでこが熱くなってるからそう感じるのだろうか？

「ううんっ！大丈夫」

本当は全然大丈夫じゃない。心がズキズキと痛むのだ。

恋をしていた時のズキズキじゃない。なんかモヤモヤしてるんだけど棘がある感じ。表現するのは難しいんだけど、とにかく僕は悩んでることがある。

付き合い始めて、八ヶ月。好きって何度も言ってくれた。キスも会うたびにくれるし、僕からもする。

それで何が不満だ？と言いたくなるかもしれない。でも僕はそれだけじゃ足りない。

もっと大翔が僕に触れてほしい。

そう思うのだけど、怖くて怖くて大翔にはそう言うことは一度も言ったことがない。

「枝垂れ桜っていいものだな」

なんでだろう？僕じゃ駄目なのかな？

「ねえ？大翔。僕って小さい？」

「何だ？突然」

「いいから答えてっ！！」

「ああ。小さいな。お前何センチだよ？確か165だよな。男にしては小さいんじゃないか？」

随分はつきり言うんだ。まあーそんなところも好きなんだけどね……。

ええ？惚気話はいいい？

すみません……。

「そう言うことじゃなくてね。なんというか……男としてなんか頼りになる、とか？」

自分でも何を言ってるのかよく分からない。

僕は太翔に認められているのだろうか？ちゃんとした一人の男、恋人として認められているだろうか？

認めていないから、触れないんじゃないかと僕は思ってる。

「大丈夫。響はちゃんと男としても、しっかりしてる」

じゃあどうしてなんだらう。どうして太翔は僕に触ってくれないのかな……。

「どうしたんだ？なんかあったのか？」

「やっぱり大翔はすごい。僕の異変をすぐに分かってくれる。」

「ううんっ何でもない」

「何でもないわけないだろ？言ってみるよ」

「そんな風に言われても簡単に言えるわけないじゃんかつ。聞いた方がいいかもしれないけど、聞きにくいものだってあるんだ。」

「僕はギョツと口を締めた。」

「言ーえ」

大翔は僕を驚かせようと、脇腹を擦こすってきた。

僕がわき腹が一番感じやすいと分かっているからだろう。僕は必至に抵抗する。

「いーやーあ」

体を一生懸命くねらせる。大翔はまだ擦こすってくる。

「うう……うう……」

くすぐりたい。

「響」

突然、大翔が僕の耳元で名前を呼んだ。優しそうな、でもどこか心配そうな声。

その瞬間、僕の口が自然と開く。

「何かあったのか？言いにくいことでもあったのか？」

僕に視線を合わせて少し屈んでくれた。僕を喋りだすのじっと待っている。

「大翔が……」

「俺が何だ？」

ずっと見つめられると思うとどうも恥ずかしい。視線をそらして話すことにした。

「大翔が僕のこと……触ってくれないから嫌いになったんじゃないか、心配で……」

「恥ずかしすぎて死にそうだ……。僕は思いっきり大翔から顔を逸らした。」

大翔は意味が分からなかったらしく、首を傾げてる。

「触ってくれないってどういうことだ？」

鈍感っ。心の中でそう言っても大翔には届かない。

決心した僕は、大翔の耳元で囁く。

「……っ!!」

その言葉を聞いた瞬間、大翔は顔を真っ赤に染めた。思っていなかった一言だったらしい。口を少しパクパクさせている。

「響!! そんなこと考えていたのかっ」

そんなこと?

大翔にはそんなことでしかなかったんだ……。

僕はシヨックが大きすぎて言葉が出なかった。

「響? おい響!!」

ええ? ふと顔をあげる大翔の顔が霞んで見える。

「あれれ?」

頬を伝っていたのは涙。悲しくて涙が出てきた。

「響泣くなよ。そうじゃないんだっ。っ。ああーもう!!」

大翔は強引に僕を抱きしめた。どういう状況かよく分からなくて目をぱちくりさせる。

「泣かせるつもりなかったのだ。ごめんな。ただそのヤツで……響を怖がられるのが怖かったんだ」

優しく僕の背中を擦ってくれる。優しい大翔。僕の体のことまで考えていてくれたんだね。

やっぱり大翔だ。僕の大好きな大翔だ。

「僕こそごめん。ただ僕はね、大翔が僕を求めてくれない方が怖いよ」

大翔が優しいのは分かってる。好きってくれるキスもくれる。でも僕はもう、それだけじゃ足りないんだ。

僕は、大翔の頭に手を回す。

そう言えば自分から大翔に誘ったことあったっけ?

してもらいたいとばかり言って、自分から何もしてあげていない

ことに気付いた。

だから今日は僕から……。

唇を重ねて、強引に僕は大翔の中に舌を潜り込ませた。驚いているのか大翔の目が点になっている。

本当に可愛いな。僕は一旦唇を離す。

「大翔。ほっぺが桜色に染まっているよ?」

綺麗な桜の花びらの様な色に染まっていた。ベースに窓の外に見える桜の舞い。

「響もね」

自分も顔が染まっている。と言われて、もっと顔が熱くなった気がする。

そんな僕の顔を見て、大翔は笑った。

大翔の桜の様な笑顔。僕がずっと独り占め。

(後書き)

「響×大翔」シリーズどうでしたか？

いつの間にか、シリーズ化していました。

そこでお知らせなのですが、毎月14日に、「響×大翔」シリーズ、更新しようと思います！！

よろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6593g/>

お花見day～桜の様な笑顔～

2010年10月8日15時30分発行